

またミチューリンは米秋林と漢字の当て字を使い、国籍欄には元露国人と便覧には記載されている。なお、ミチューリンは戦後一九四六年いち早くソ連国籍を取得した。

そしてこの戦前の露西亜会報最終号には、会の活動が許されぬ情勢にあり、例会もなく、在校生のために催した「ソ連事情講演会」も中止のやむなきに至ったという八杉貞利の苦渋に満ちたあとがきが付されている。

九 東京外事専門学校から東京外国語大学へ

一九四四（昭和十九）年に東京外事専門学校と校名が変更され、修業年限も三年に短縮され、本科は第一部（支那科、蒙古科、タイ科、マライ科、インド科、ビルマ科、フィリピン科、イスパニア科、ポルトガル科）と第二部（ドイツ科、フランス科、ロシア科、イタリヤ科、英米科）に分かれており、学則第一条には「本校ハ専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及（中略）其ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トス」と「八紘一字」の精神が高らかにうたわれていた。

一九四三年からは勤労働員などで三年時の授業は行われなかったが、これも学則第六条「授業ハ教授及修練トス。修練ニ付テハ別ニ之ヲ定ム」と明記されていたのだから、当時の状況からすればやむを得ぬ事態だったのだろう。

この当時学生生活を送った原卓也（昭和二十六年卒）によると、西ヶ原に新築した校舎は一九四五年五月に焼失、上野の東京美術学校や図書館講習所、美術研究所などに分散して授業をし、四六年九月から上石神井の東京電波兵器技術専修学校跡の木造棟と、智山中学の一部を借用して授業が再開された。木造棟はおそろべき代物で、窓にはガラスでなく障子紙が貼ってあり、狭い中庭をへだてた向いの棟には引揚げ者の家族のおむつや洗濯物がひるがえってい

たという。暖房などないので、窓から障子紙を引きはがしてバケツで燃してしまつたので、吹きさらしの風が肌に刺さり、近くのドイツ語やフランス語がそのまま聞えるといった状態だつた。

それでも外事専門学校の卒業生のなかには、国費留学生としてモスクワ大学に留学し、ロシア史を専攻、帰国後東京大学教授となり、日本ロシア文学会々長を務めた米川哲夫（米川正夫の長男）、ロシア文学の相馬守胤（日本では数少ないサルトウイコフシチエドリン研究者、札幌大学教授）やソルジェニーツィンの翻訳者として知られ、ロシア美術にも造詣の深かつた木村浩（故人）、新聞社モスクワ特派員の草分け的存在ともいえる白田昭三郎（共同通信社）、谷畑良三（毎日新聞）等がある。

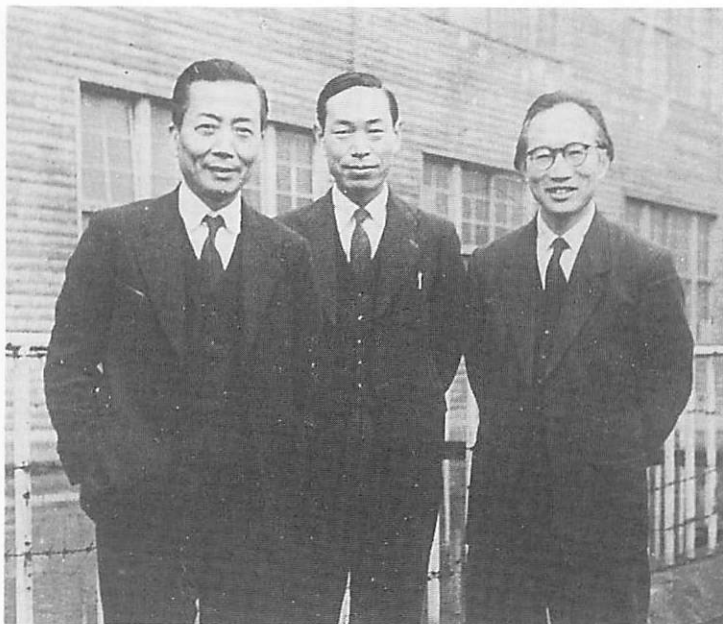
前学長原卓也は外事専門学校最後の卒業生であり、希望者一四名が新制大学三年次に編入することが認められ、形だけの入学試験で全員が合格したという。

新制東京外国語大学の発足当時は一二語科制だったが、一九五一（昭和二十六）年から第一部（英米）、第二部（フランス、イタリヤ）……の全七部制に改編され、ロシアは第四部になった。

学科名の変遷を列挙しておく。ロシア学科（一九四五—五〇）、第四部（五一—六〇）、ロシア科（六一—六三）、ロシア語学科（六四—九〇）とめまぐるしく移り変り、一九九一年からはポーランド・チェコの両語科を加えロシア・東欧語学科が発足するが、九五年には、学部改編によってロシア・東欧課程として位置づけられることになった。

大学発足当時のロシア科教員スタッフ

大学発足当時の専任教官スタッフは、教授・佐藤勇（一九六四年退官、以下西暦は退官年を示す。八九年没）、助教・東郷正延（一九五七年から教授。七一年）、和久利替一（一九六一年から教授。七四年）、講師・石山正三（一



戦後のロシア語学科のスタッフ。左から、佐藤勇、和久利誓一、東郷正延

九六二年から教授。七三年没）、外国人教師アレクサ
ンドル・ミチューリン（五七年没）、外国人講師ポリ
ス・ストルジェシエフスキー（五四年没）であった。
そしてこの佐藤、東郷、和久利、石山体制は一九六四
（昭和四十）年の佐藤の停年退官までつづく。つまり
ほぼ二〇年間、ロシア科の専任スタッフは不動のまま
であったわけだ。

教科書としては、一年次の文法の入門書として八杉
貞利の『ロシア語階梯』が用いられ、石山正三が担当
し、それ以外にニーナ・ポターポヴァの『RUS-
SIANS』とこう英語版のテキストが長い間使われ、残
りの専任教員が順番に教えたようだ。

また、語学、文学、事情という区別はすでであった
が、必らずしも厳密に守られていたわけではなく、少
なくとも学生の側からすると全員がロシア語の先生と
いう印象が強かった。ロシア地理などを講義していた
佐藤が事情で、石山、東郷が語学、和久利が文学とい
う区分だったと思われる。



石山正三

外語に現存する戦後で最も古い一九五一（昭和二十六）年の講義題目によると、専門科目としてロシア語史（米秋林、佐藤）、ロシア文学史（和久利誓二）、作家論（トルストイ）（石山正三）、ソヴェト社会概説（佐藤）、ロシア語講読（東郷）、時事作文（佐藤）の諸科目が立てられている。また二年後の一九五三年には、ミチューリンによる日露関係史の講義が加わっているのが注目に値する。

一九五四年にストルジェフスキーが退職、五六年にミチューリンが死去すると、その後は外国人のポストがどうしてか召しあげられてしまったため、ネイティブ・スピーカーによる教育は、非常勤のワルワラー・ブブノワ（五七年から翌年ソ連帰国まで）、タチャナ・オブル・野村（五八―七〇）、タマラー・原（七一―）に頼る状態が二〇年以上も続いた。したがってこの時期に学んだ学生（筆者も含めて）は、卒業時の会話能力という点では、その前後の時期の学生よりも劣っていたにちがいない。また発音もお世辞にも良かったとはいえないだろう。にもかかわらず、卒業生の多くが、ジャーナリストや商社マン、外交官としてモスクワを中心とするソ連各地で活躍できたのは、大学を出てからの苦勞の賜としか思えない。

筆者自身の記憶でも、一年次にはタチャナの四〇名単位での会話（といっても民話の暗唱）があつたが、二年次にはまったく外国人の授業がなかったため、三年次用に非常勤として会話を担当した橋本（岩田）みさご（ソ連育ちでモスクワ大学日本語科卒業）は、学生の発音を聞いて激怒し、戦前のトドロヴィチのように、一人ひとり徹底して発

音矯正に努めたものだった。

そして六六年にロシア語科は、定員四〇名が六〇名となり二クラス制に移行、定員増に伴い助教として新任するのが原卓也である。また佐藤勇の後任として助手のポストにあった城田俊（昭和三十四年卒。モスクワ大学大学院修了）が北海道大学助教に転任したため、チェコ留学中の磯谷孝（昭和三十八年卒）が助手に採用された。なおこの年には経済学の岡田進（昭和三十五年卒）が講師になり、ロシア科の事情講義も担当することになったため、事情の非常勤講師としてソ連経済を講じた宇高基輔（東大教授）が解囑となった。なお事情の非常勤講師としては竹浪祥三郎、和田敏雄（昭和二年卒）、元毎日新聞の渡辺三樹男、ついでロシア史の菊地昌典（東大助教）が教鞭をとっている。また前述の橋本みさご講師の担当時間は、前年の二時間から八時間に激増している。

ところで一九五七（昭和三十二年）年にソ連が人工衛星スプートニクの打上げに成功し、六一年にはついにガガーリンを乗せた有人宇宙船ヴォストークが打上げられたことは、世界中に衝撃を与え、東大など理科系の学生にロシア語の履修を義務づけるところまで出て、ロシア語熱は非常に高まり、この頃のロシア語科の入試倍率は一五倍を前後していた。またこの時期は六〇年安保の直後のことでもあり、巷では「カチューシャ」や「黒い瞳」といったロシア民謡が歌声喫茶で盛んに唄われたものだった。

こうしたなかで、二〇年近く続いた不動の教授陣が佐藤（一九六四年）、東郷（七一年）、和久利（七四年）の退官と七三年十一月十四日の石山教授の不慮の死（後述）によって大きく変わっていく。佐藤は八一年に念願の「和露辞典」（講談社）を、東郷は日ソ学院長の激務の中、故石山、染谷茂（昭和七年卒、上智大学名誉教授）、磯谷孝らの助力を得ておそらく世界最高の収録語数と豊富な文例、類似語の懇切な説明を盛りこんだ「研究社露和辞典」（八八年）を、和久利は長らく改訂がなされなかった八杉貞利の「岩波露和辞典」を、新田實（昭和二十九年卒）、飯田規和

(昭和三十年卒)との共同編集で全面的に改訂し、収録語数も従来より大幅に増え、新語も収録した使い易い辞書として、ロシア語学習者に重宝がられている『岩波ロシア語辞典』(一九九二年)を出版した。和久利の『テーパー式ロシア語便覧』(一九六〇年初版)は、中級文法書として四〇年近く全国のロシア語学習者に愛用された。なお東郷、和久利ともに日本ロシア文学会の会長を務めている。

全共闘運動と石山正三の死

すでに通史編や、フランス語科の歴史のなかでも述べられているとおり、一九六〇年代末から七〇年代前半にかけては、本学で全共闘運動の嵐が吹き荒れた。そしてこの運動の中心メンバーには、ロシア語科の学生が少なからずいた。カニ工船に乗るため、大学を自主留年した結果、この運動に遭遇した筆者としては、その当時の雰囲気や記憶の中から甦らせなければならぬ。

あれは一九六八(昭和四十三)年九月も終り頃のことだ。およそ一年半ぶりに母校の正門に入った筆者は、「〇管規負担区分粉碎!」のバカでかいタテ看板に度肝を抜かれた。筆者の知っていた外語の政治運動は、民青系の学生による歌声運動やビラ配り程度で、時折革マルを称する数名が、学内を悲憤な顔つきでデモするのを見かけるだけだった。それがどうだ! わずか一年半大学を留守にただけで、バリケード・ストライキを訴えるまでに政治意識(?)が高まっているとは。信じがたい気持ちで、ロシア語科の一年生が占拠しているという木造校舎二階の学長室へ行き扉を開いた。まっさきに目に飛びこんできたのは学長席にふんぞり返る白ヘルにタオルで覆面をした神経質そうな若者だった。自分の名を名乗り、事情説明を聞こうとする筆者に返ってきた言葉は「日和見!」だった。

曲りなりにもカニ工船で半年、その後一年父親の稼業の印刷業を手伝ってきた筆者には、この「日和見!」という

決めつけは許しがたかった。何か反論しようとした時である。壁際にたむろしていた一〇名近い女子学生が口をそろえて「日和見！」の合唱。これでは対話は成り立たないと考え、昔の友人を探すことにした。

といつても留年生を探すのは、そう容易ではなかった。彼らはほとんど大学に顔を出すことがなかったのだから。そうこうするうちに授業を潰してのクラス討論、それがみる間にストライキ実行委員会へと発展していき、またたぐ間に全学ストライキに突入してしまったのである。当時伊東光晴教授と山之内靖助教授のゼミに参加し、初期マルクスの陳外論と社会主義経済における利潤論争の理論的整合性が可能かということの研究テーマにしていた筆者は、若い学生たちの過激さにはとてもついていけなかったが、彼らが提起している問題は、単なる寮問題の枠をはるかに越え、資本主義体制の根幹を揺がすものに映った。したがってバリケードの内か外か——と聞かれたら、内側にいたと答える。そして自分自身、人生に迷いながら、スローガンの持つ空ろさにも気づきつつ、まったくの部外者として傍観的態度を取ることができなかった。

第一に驚いたことは、それまでまったくのノンポリだと思われた学生の間から、続々と見事なアジ演説をする学生が出てきたことだ。大学など来ることなく、寮で議論に習熟していた連中かも知れないが、その時受けた印象は、その後ロシア思想史研究の道に進んだ筆者には、バクーニンの「闘争の中でこそリーダーが生まれる」という理論の正しさを証するものとなった。

今思うと非人道的もはなはだしいあの二昼夜に及ぶ大衆団交。寒さがしんしんとつる中、老教授たちにせめて毛布をとという意見も「日和見！」の一言で一蹴されてしまうのだった。

第二に、議論の場では、つねに急進的な意見が力を持ってしまふということを思い知らされた。

その頃のロシア語科は、学生と教師が授業以外で付き合うことはほとんどなかったから、教授会で起こっているこ

となど、筆者は知る由もなかった。ただあの疾風怒濤のような事件がなかったなら、自分が今東京外大の教師をしていることもなかったと思う。ハネ上り、無責任、独善的といろいろな全共闘に対する批判はあろうが、彼らの提起したほとんど解決不能な問題の解をもとめて一生苦闘している人間は想像以上に多いと確信している。

筆者がロシア思想史という学問分野に惹かれたのも、そうした雰囲気の中での自主的読書会からだった。大学側のロククアウトが長引くなか、五月に唯一残っていた単位を充足するべく卒業論文を執筆し、六九年六月三十日に卒業証書が送られてきたのだった。

そして卒業から五年経った七三年の十一月、石山正三学生部長の訃報に接した時の衝撃は今も忘れない。二度目の学生部長として学生との団交に明け暮れ、積み重なった疲労が原因であることは明らかだだった。

決して嘘のつけない性格で、クラス雑誌のアンケートの「将来の希望」欄に堂々と「学長」と記すような人だだった。野心家であったのは事実だが、虚栄心とは無縁な人だだった。「すべてに對して一本筋の通った石山先生の気骨ある態度」と当時の在学生在が記すとおりの人だだった。まだ五十代半ばだったが、勤続三二年八か月と外語では最古参の教授だだった。合掌。

十 紛争前後から現在まで

一九七四（昭和四十九）年の和久利誓一の停年退官に伴って原卓也が学科主任となり、札幌大、北大を経て、外語に着任した新田實（昭和二十九年卒）、磯谷孝、また石山、和久利の後任である飯田規和（昭和三十年卒）、志水速雄（昭和三十六年卒）が相次いで教授陣に加わり、スタッフは一新される。以来八九年に学長に就任するまで一五年近